



康應主印
圖書印
藏書印

CL 7
No 332
Vol 1

明治三十四年四月

福翁百餘話
全

時事新報社發行



福澤先生福翁百話の著あり次て其餘談を記して福翁
百餘話と名づけ記して十九篇に及び更に福翁自傳
并に女大學評論新女大學の著述を思ひ立たれ暫らく
餘話の起稿を中止せられしに明治三十一年九月新女
大學の稿終るや遽に大患に罹り爾來全く著述の筆を
絶たれたり即ち此十九篇は明治三十年中の執筆に係
りしものにして文中或は自傳に出でたる事實と重複
する所あるは其自傳の前に成りしが爲めなり一より
十四までは三十一年中、十五より十九までは昨年中の
時事新報に掲載したるが世間には頻りに其出版を望

するもの多きに依り今回更らに一冊子として刊行
することゝ爲しぬ

明治三十四年四月

時事新報社に於て 石河幹明記

福翁百餘話目次

人生の獨立……………	(一)……………	一頁
博識は雅俗共に博識なるべし……………	(二)……………	四頁
獨立は獨り財産のみに依る可らず……………	(三)……………	八頁
金と自身と孰れか大事……………	(四)……………	十二頁
獨立の根氣……………	(五)……………	十四頁
獨立者の用心……………	(六)……………	二十頁
文明の家庭は親友の集合なり……………	(七)……………	二十五頁
智徳の獨立……………	(八)……………	二十八頁
獨立の忠……………	(九)……………	三十三頁
獨立の孝……………	(十)……………	三十七頁

福翁百餘話

人生の獨立（一）

福澤諭吉

とは文字に書けばこそ六ヶしきやうなれども左まで深き意味あるに
非ず唯他人の厄介にならぬことなり生れて父母の養育を被るは人間
普通の約束にして父母これを徳とせざるも子は其恩を忘るゝことな
し是れは別段の話にして獨立云々の義を以て律す可き限りにあらざ
れども成年既に父母の手を離れて一人前の男女となりたる上は最早
や他の保護を仰ぐ可らず他人は勿論現在の父母に對しても之を煩は
すは獨立の本意に背くものなり扱その獨立にも心身二様の別ありて

福翁百餘話目次終

立國……………	(十一)	四十二頁
思想の中庸……………	(十二)	四十五頁
人に交るの法易からず……………	(十三)	五十二頁
名譽……………	(十四)	五十五頁
禍福の發動機……………	(十五)	五十八頁
貧生の苦界……………	(十六)	六十四頁
物理學……………	(十七)	七十五頁
貧富苦樂の巡環……………	(十八)	八十八頁
大節に臨んでは親子夫婦も會釋に及ばず……………	(十九)	九十三頁

衣食住有形の需用を自力に辨ずるを身體の獨立と云ひ社會の交際處
世法に我思ふ所を云ひ思ふ所を行ひ滿腔豁然洗ふが如くにして秋毫
の微も節を屈することなきを心事無形の獨立と云ふ斯く二様を全う
して始めて人生の本意に叶ふとなれども其有形無形孰れか遠近と尋
ぬれば先づ有形の獨立を得るに非ざれば無形の獨立は遂に望なきこ
とゝ知る可し熱界無數の人皆心事無形の獨立を欲せざる者なし大人
君子は勿論車挽き土掘る下人に至るまでも漫に人に屈して自から欺
くを好まず其氣品に文野粗密の別こそあれ概して言へば人々皆その
言行を自分の意に任せて憚る所なきを顧ふと雖も爰に困難は衣食住
の一事にして衣食足らざれば言行意の如くならず常に退いて自から
屏息するの外なし其屏息は尙ほ忍ぶ可しとするも衣食の爲めに特に
自から進んで思はぬと言ひ思はぬことを行ひ遂には所謂五斗米の

爲めに腰を屈して交際社會に他と共に醜體を共にし自から知りつゝ
自から本心に背く者さへなきに非ず斯の如きは即ち有形の獨立を得
んが爲め早く既に無形の獨立を忘れたる者にして畢生一個の賤丈夫
たるを免かれず酷に之を評すれば彼の詐欺師が錢を得て樂をせんと
て法を犯し其運動中法の爲めに捕縛せられて不自由の身と爲り快樂
を求めるの方便は偶ま苦痛の媒介たるが如し唯氣の毒なりと云ふ可き
のみ左れば人間處世の法は先づ衣食住有形の獨立を謀りて後に心の
獨立に及ぼすこと當然の順序にして兎に角に一身一家の生計は自力
を以て辨ずるのみならず其經營中にも節を屈するの鄙劣は犯す可ら
ず即ち行路の易からざる所以にして獨立の文字は之を解すること容
易にして之を身に行ふことは難しと知る可し

博識は雅俗共に博識なる可し (二)

四

博識とは知識見聞の博きことにして必ずしも善き事のみを知るに非ず悪しき事をも知り盡して之を行ふの方法をも辨へながら君子は敢て之を行はざるのみ之を知りて之を行ふ者は小人にして之を行はざる者は君子なり在昔花の都の京都に住居する伊藤東厓先生が接竿の三味線箱を買て座右に愛玩しながら其三味線箱たるを知らざりしとは先生の品行徳義を表する一話にして當時に於ては自から門弟子を感化したることならん即ち先生は鄭聲を耳にせざれば固より三味線に接竿などあるを知らず清淨無垢の盛徳なり吾々こそ赤面の至りなれとて其評判を遠近に傳ふれば感化の區域も自から廣くして世々大功德を興へたることならん我輩固より此種の感化力を蔑視するもの

に非ざれども社會の文明次第に進歩して世事の繁多を致し隨て人心の變化も常ならざる今日に於ては後進生に對する德育法も自から趣を異にせざるを得ず其方法に於て一は之を徳義に導くと一は不徳の中より救ひ出すと二様の別あり即ち徳に導くの法は長者自から先づ其身を脩めて滿身一點の汚穢を留めす口に徳論を喋々せずして實際の事實を舉動に示し知らず識らず徳義の則に従はしむるとなり家族團樂子女は唯父母の爲す所を見習ふが如き最も有力なる徳教にして東厓先生の門弟子に於けるも此種の感化法なり然りと雖も少年子弟の漸く成長して漸く不徳不品行に傾きて既に深入したる者を救ひ出して矯正せんとするには單に不言の感化法を以て足らざるの場合少からず此輩に向ては恰も此方の身を不徳不品行の境遇に置て其快樂の深淺を探り其熱心の情を測量し一切萬事當局者の秘密を知り盡し

五

て扱この不徳不品行は一身の爲め一家の爲め又世の中の爲めに利か
 不利か損か得かど明に利害の所在を示すの一法あるのみ例へば色に
 耽る者あれば花柳社會の事實を談じ勝負事に凝る者あれば其事の種
 類に従て夫れ／＼の計略手練を語り秘中の秘時としては當局者の意
 表に出る程の秘密を明にして先づ其膽を奪ふて然る後徐々に本人
 の身の爲めに不利なる次第を説く可し博奕の意見は博徒の親方に限
 り道樂息子の折檻は花柳の通人苦勞人に託す可しと云ふも偶然に非
 ず學校生徒の監督は曾て素寒貧の磊落書生たりし者に非ざれば叶は
 ず一軍の大將は下士兵卒より立身したる者にして重きを成す可し此
 類の事例を計ふれば枚舉に遑あらず之を要するに事柄の善惡醜美に
 拘はらず其事の内實を知らざれば共に謀るに足らず經驗に於て違ふ
 ことなき所のものなり人或は云く後進生の不徳不品行を救ふが爲め

に其惡事の内實を詳にせんとすれば已れ自から先づ同様の惡事を犯
 さざるを得ず去りとは世の中に一惡を除かんとして却て一惡を増す
 に異ならずとの説あれども是れは人智の働きを狭く測量したるもの
 なり苟も人として才力あり又根氣ある者なれば人間萬事雅俗に論な
 く之を知らんとして知る可からざるものなし身躬から時計師ならざ
 るも其運轉法は知る可し身躬から辯護士ならざるも其辯論する所の
 法理は之を解するに難からず況んや惡少年輩が遊冶放蕩酒を飲み花
 を鬨はし花柳に戯れ借金に魂膽する内情の如き之を知るは易中の易
 にして身躬から實驗するの要なし歌人は居ながら名所を知ると云ふ
 少しく心を用ふれば彼等の惡事を探り其内實の秘密を看破して却て
 本人等の未だ思ひ至らざる所にまでも論及して之を驚かすことある
 可し唯世間博識の君子にして始めて能く此任に當る可きのみ今の社

會は伊藤東厓先生を以て自から満足す可き時節に非ざるなり

獨立は獨り財産のみに依る可らず (三)

一身の獨立を成さんとするには自力自活苟も他人に依頼す可らず即ち財産の貴き所以にして今更ら喋々論辯の要なしと雖も單に財産のみに重きを置いて知徳の之に伴ふなきに於ては折角の財産も用を爲さずして憐む可き境遇に陥り其慘澹苦痛の實際は貧者の貧苦に百倍するとあり例へば最親最愛なる父母妻子の病に臥すとき醫を擇ぶの法を知らずして庸醫の手に託し病勢次第に進むを見て主人は如何なる感を爲す可きや金錢にて回復するものならば百千金も敢て愛しまず何とか方便はなかる可きやと獨り心配する其時に隣翁來りて何の藥舖に妙藥ありと告れば之に依頼して其賣藥を買ひ此病は金神鬼門井

戸の祟なりと言ふ者あれば其言ふがまゝに従て家を毀ち井戸を埋め星の吉凶を聞て醫師を取替へ日柄の黑白を占ふて家を移し腐敗水も反故紙も御水なり御札なりとて授けらるれば難有しと合掌して之を大病人に服用せしむるが如き事實は世間に珍らしからず此時に當りて主人には何等の所見もなく唯他人の云ふがまゝに任せて怡も大切なる病人を弄ぶに異ならず蓋し知らざるが故に迷ふなり迷ふが故に弄ぶなり弄ばるゝが故に全快すべき者も斃るゝなり主人は家に巨萬の財産を積むと雖も其無智なるが故に大事に當り心の獨立を成さずして徒に苦痛する者と云ふ可し又家族團圓父母の品行正しく言語舉動優しくして冥々の間に其德風を以て子女を感化す德育唯一の法なり然るに古來世の中に愚子女なきに非ず自から天賦に出るもあらん又惡友の爲めに誘はるゝもあらん一概に父母に向てのみ罪を歸す可

きに非ざれども世に云ふ有力有爲の士人なる者は兎角戸外の事に多
忙にして内を視るの暇を得ず殊に近來都會の地にては西洋風の交際
とて婦人も男子と共に外の交りに忙しきものあり婦人の外出固より
咎む可きに非ず次第に其交際法を進むこそ文明の本意にして女權の
發達も自から期す可きなれども事物は間違ひ多き世の中に於て西洋
風の新參者ども名づく可き此種の交際男女が交際と云へば文字の如
く外の交際のみに心を盡して却て樂しき我家の内に爐邊團樂の至情
を打忘れ親子の間いつとなく疎遠にして相互に其爲す所を知らず其
思ふ所を知らず古人の語を用ふれば父不父子不子して遂に其子は如
何なる者に成行く可きや之を推測するに易からず幸に一人前の男女
と爲れば不思議の仕合なれども氣の毒なるは世間に珍らしからぬ少
年子女の不行跡なり其愚なる者は奇禍に罹り其智なる者は奇禍を作

り出して詰る所は父母心痛の種ならざるはなし其子を愚なり奸なり
不孝なりとて義絶するも勘當するも子は則ち子にして親たるの責は
免かる可らず其極度を云へば子女の行跡いよ／＼ますます悪事の一
方に進歩して終に法網に罹ることありとせんに其際に兩親の心の中
は如何なる可きや凡そ此子の非を改めて人間普通の體面を保たしむ
るの方便あらんには身外の萬物愛しむに足らず金錢家倉を何にかせ
ん隣家貧賤の翁媼が細き烟を立てゝ子供と共に粗衣粗食すること羨
ましかれど是に至りては親の功名心も根柢より斷絶して絶世の名
聞巨萬の富有れども無きに等しく自から自身の既往を顧みて多年の
辛苦漫に富貴を求めたるの愚を後悔するに至る可し左れば人世の獨
立に資産は固より必要にして缺く可らずと雖も肉體の外に心の獨立
を成さんとするには錢の外に大に重んず可きものあるを悟りて畢生

の注意怠る可らざるものなり

金と自身と孰れか大事 (四)

諺に先だつものは金なりと云ふ如何にも其通りに相違なく商賣工業に資本金の必要は申すに及ばず居家處世出るにも入るにも金なくては何事も叶はず人間萬事金の世の中と云ふも可なり即ち萬事に先だつものなれども一寸思を轉じて考れば此金に比較して百倍も千倍も重きものあるを發明す可し其重きものとは何ぞや身體の健康即是れなり人身健康ならずしては假令ひ死に至らざるも常に不自由不愉快にして自から樂しむを得ず美食口に旨からず輕煖身に可ならず巨萬の富も之を積み得て心身の快樂を買ふに由なし況んや巨萬の富なき者に於てをや辛苦經營は獨立の生計を得んが爲めなれども病身もの

は辛苦せんと欲するも得べからず唯坐して自から病苦貧苦に苦しむのみ左れば人間萬事先だつものは金に非ずして身の健康にこそあれ誠に分り切つたる事にして三尺の子供にも了解す可き筈なるに六尺の男子五尺の婦人にして之を辨へざるこそ不思議なれ彼等が幼少の時より教育せらるゝ其教育の中には固より攝生の要領を學びたることとあらん假令ひ教科として學ばざるも人の言の端に聞きたることもあらんに一切の教育忠言は唯耳に入るのみにして心に留まらず恰も肉慾の驅る所と爲るに非ざれば精神一偏の爲めに支配せられて形體の保存法を忘れ眠食常ならず動靜宜しきを失ひ時に大に過食し又時に大に飢ゑ昨夜は三更に至るまで談論して酒を飲み又獨り勉強して書を讀み今日の朝の食事をも忘れて午時尙ほ未だ起きずと云ふが如き都て是れ不養生の大なるものにして少壯の血氣一時或は之に堪ふ

るが如くなるも人身の生理は争ふ可らず富豪家の病身學者の短命な
ども自から其由來する所を知るに足る可し殊に笑ふ可きは彼の實業
家など稱する輩が様々の事に周旋奔走する其目的を聞けば財産を作
りて獨立の生活を立つる積りなりと云ふ至極よき心掛けなれども其
周旋奔走とは多くは例の交際社會に不養生を犯すの外ならず目的の
如く獨立の生活を成し得て其身は早く既に廢物と爲る、元來何の爲め
に勉強したるや解す可らず畢竟金を重んずること其實に過ぎて自身
を忘れたるものと云ふ可きのみ

獨立の根氣 (五)

獨立の大義を全うして生涯を終り之を子孫に傳へ又世間を誘導せん
とするには苟も怠る所ある可らず是れは些末事なり此位のこととは如

何様にても苦しからず百中の二三、假令ひ聊か氣に濟まぬ所はなきに
非ざれども又その中には取返し道もある可しなどゝて恰も自分の
言行を自から大目に看過して節を屈するが如き獨立の志を抱て獨立
の根氣なきものと云ふ可し在昔或る九州藩の士族に茶の湯を好む者
あり生涯の楽しみは唯茶道一偏にして一年三百六十日曾て一日も廢
したることなかりしが或る年この茶人が藩用にて江戸に行くとき茶
器一切を荷物の中に藏め東海道中宿に着すれば終日旅行の疲れをも
厭はず急ぎ水を呼び火をねこして宿屋の座敷に一場の茶席を開き相
手なければ獨り自から楽しむこと平生の如くにして毎夕相替ること
なし同行の士は之を見て却て面倒にや思ひけん茶の湯の湯の數寄も左る
ことながら此忙しき道中に餘り氣樂ならずや實めて道中丈けは思ひ
止まり江戸着の上にて寛るゝ樂しまれては如何と忠告せしに茶人

は泰然として驚かず御心付の段は辱なけれども道中の日も亦人間生涯の一日で御座ればと答へしのみと云ふ即ち此九州士人の如きは茶道の志篤くして畢生その志を貫くに根氣強きものと云ふ可し又事柄は異なれども余が身にも似寄りの事ありて其實は根氣薄きが爲めに失敗したり今を去ること凡そ十五年前塾友小浦準三郎氏より端谿の硯一面を貰ひ頗る愛玩して常に座右に置き家人の使用を許さざるのみ加之を洗ふときも必ず自分の手を以てして人に任せたることなく十五年一日の如くにして恰も文房の至寶たりしが去年の何月にや月を忘れたり或日何か執筆のとき沈思に凝り顧みて硯の汚れたるを見て快からず一方に物を考へながら下女を呼び此硯を急ぎ洗ふて参れと申付け尙ほ言葉を添へて大事な硯なるぞ丁寧にして粗勿するなと口の先に言ふのみにして其實は下女の誰れなるや其面をも見ず恰

も夢中に硯を渡したりしに暫くして其下女が走り來り机の傍に平伏して唯今臺所にて洗ふ折柄誤て桶鉢に打當てゝ損したりと云ふ余は始めて夢の醒めたる如く是れはと驚きたれども女を叱りても益なし飛んだ事が出來たのうと云ふ位にて夫れなりにしたれども其實を云へば十五年の久しき唯の一度も人手に觸れしめたることなき至愛の品を如何なる譯にや夢中に人に渡し始めて渡したる其第一着に誤て見事に損したり畢竟下女の罪に非ず主人の怠慢なり根氣薄くして一時を輕々に看過したるが故なり多年愛玩して眞に大切なりと思ふならば何故に例の如く親から之を洗はざりしや平生は其大切なるを知りながら不圖これを忘れたるころ愚なれ當時何か文を草せんとして其立言の思案に沈みたるが故なりと云はんかなれども斯の如きは即ち思案に沈むに非ずして寧ろ狂したるものなり斯く自問自答すれば

終に主人は辯解の辭なきに窮して赤面するの外なし以上は單に硯一面の話にして其物の得喪は以て眞實の喜憂とするに足らざれども人間萬事この硯に類するものこそ多けれ文明の學者が少小の時より教育の門に入り辛苦學成りて將さに人事に當らんとする其時には自ら自身を重んずること甚だしく居家處世唯獨立の一主義あるのみとて其言行の頗る高尚なりしにも拘はらず扱この獨立男兒がいよいよ出身して官途に就かんとすれば自から官途固有の習慣情實あり實業を求めんとすれば實業社會無限の弊風あり右に進路の故障を見れば左にも亦運動の自由を妨げられ生活不如意の其中にも漸く三十前後の年齢にも至れば人の勸めに任せて妻を娶るの必要もあり一家の生計戸外の交際に唯不足なるは黃白の物にして内外共に意の如くなるを得ず是に於て次第に浮世の風に風化し濁水の流に流れ本來の獨

立心は敢て消滅したるに非ざれども是れ式の事は必ずしも一身の獨立を累ずに足らず此れも枉げて勘辨せよ其れも目を瞑して斷行せよと身躬から自身を強ひ自身を欺き甚だしきは尺を枉げて尋を直うするなどの口實を設けて節を屈する者多きこそ淺ましき次第なれ彼の西洋に遊學したる者が多年勤學の後歸國したる時の様は如何にも盛にして此男こそ眞實獨立の意味を解したる者ならんと思ひの外何時の間にかやら日本の風に吹かれて心身軟弱たわいもなき通俗男子に化し去るの例は年來余が親しく實驗する所なり左れば男子の志を立てるは最初より其方針を定むること固より大切なれども之を決定したる上にて飽くまでも變化することなく徹頭徹尾これを貫くの根氣は更らに大切なり前に記したる九州藩士の茶の湯は根氣の永續したるものにして福澤翁の硯は根氣の挫折失敗したるものなり事小なりと

雖も之を玩味すれば自から味ある可し

獨立者の用心 (六)

一身一家の獨立とは西洋文明の風に從へば誠に珍らしからぬ事にし
て尋常普通人間の勤む可き勤なれども扱新開國たる日本に於ては何
か耳新らしく聞えて人に説くこと易からず蓋し我古來の習慣に於て
人と人との交際近きに過ぎ濃なるに過ぎ自然の勢遂に依頼す可らざ
るに依頼せんとするの風を存するが故ならん亦是れ儒教の餘毒と云
ふも可なり此相互依頼の空氣中に居て獨立を説くの難きは尙ほ忍ぶ
可しとするも其獨立論者が動もすれば世間に誤解せられて忌ましく
思はれ憎くらしく見ゆるこそ氣の毒なる次第なれ其事情の大概を陳
べんに

人生獨立の第一要は自力自活苟も他人の厄介たるを許さず一切萬事
自分の責任を以て生活するが故に私有財産を守ること固きのみなら
ず自家の私有を重んずると同時に他の私有をも犯さず例へば金の必
要あればとて吃と返済の目的あるに非ざれば借用することなし若し
萬一も之を借用して返済不如意のこととあらんか金主より催促の有
無に拘はらず其時の心配苦痛は白刃を以て背後より追はるゝ如くな
るべし在昔木下藤吉は主人松下嘉平治の金を持逃げして立身の後大
に之に酬いたりとの談あれども是れは亂世英雄の事にして天下後人
の手本に非ず今の獨立士人は自から額に汗して自から食ひ有餘を積
み不足を忍び他に對して一毫も取らず一毫も與へざるの主義なれば
外面より窺へば其舉動澁くして華やかならず時としては利に偏する
の俗評なきを得ず

又獨立者の言行は多くは主觀より生じて客觀に誘はるゝこと少なく
 即ち言行の自由なるものなるが故に自分には他人を傷くるの意なき
 にも拘はらず動もすれば偶然に其人の弱點を犯すことあり自から其
 感情を害して忌ましく思はるゝも是非なき次第なり然かのみならず
 其實獨立と決定したる上は單に財物に就て人の助力を求めざるのみ
 ならず居家處世の事に關して一言一行も自から守りて鄙醜を犯さず
 用心堅固にして陰に陽に讒を暗示さるものなれば是亦俗眼に映じて
 甚だ面白からず善を好み惡を惡むは人生の本心なりと云ふも人情世
 界は必ずしも然るを得ず東隣の主人品行方正にして萬般の施設都て
 愚ならず之に接して何事も條理は能く分れども其人は常に平氣なる
 が如くにして且つ他人に對して一身上の私を語ること少なければ果
 して得意なるや失意なるや容易に測り知る可らず其敵意なきは明白

なれども何分にも交際上武骨にして興味少なしと云ふに反して西隣
 の男子は舉動活潑にして禮儀も正しく一見君子の如くなれども其内
 實を探れば家政治まらずして常に金策に窮するのみならず其身の品
 行も亦法外に逸して言ふ可らざるの醜を犯し之を匿して匿すを得ざ
 るの窮境に陥れば則ち人に依頼して萬般を懺悔し彼の秘密の口留め、
 此一件の始末平に御頼み申すとして平身低頭すること毎度例の如し要
 するに此男は外面こそ君子なれ裡面は鄙醜の穴だらけにして獨立を
 去ること遠き者なり扱此東西兩隣の人を並べて俗世界の交際に孰れ
 か通用宜しと尋れば武骨なるよりも頭の低き者こそ人に容らるゝの
 常なれ世人は此穴だらけの穴を知らざるに非ざれども其穴の多きは
 即ち其人の與みし易き證據なれば恰も之を捕虜として内心に輕蔑し
 ながら遠慮なく附合ひす可し况んや鄙醜と鄙醜との交際に於てをや

其醜いよ／＼醜にして交りはいよ／＼堅し獨立士人が八方に忌まれ
 憚かられて獨り自から超然たらんとするは易き業に非ざるを知る可
 し

左れば世の學者士君子にして獨立以て身を終らんと決定したる者は
 自から其身を守ること嚴正なる可きは今更ら言ふまでもなきことな
 れども其自から守ると同時に人に交るの法は大に趣を殊にして寛仁
 大度を以て自から居り胸中の濶きこと河海の如くにして賤丈夫も來
 れ輕薄兒も來れ塵も埃も一切厭はず苟も直接に我身を害せざる者は
 都て善人なりとして之を容れて之を親しみ其改心悔悟を促すの道は
 徒に口に喋々せずして我心身の眞面目を示し他をして獨り自から發
 明せしむるに在るのみ僅に獨立の一斑を知り得て忽ち得意を催ふし
 我こそ天下獨立の人なりと稱して周圍を蔑視し苟も己れに異なる者

を嫌ひ憎んで却て自身の交際を狭くし却て人に忌まれ憎まれて不平
 に終るが如きは獨立の君子に非ずして其實は小人の偏屈なる者にこ
 そあれ獨立の大主義は學者安心の至寶なり寶物は大切に於て深く秘
 藏す可し眞宗の教に念佛行者と人に悟らるゝ勿れと云ふことあり余
 も亦此教に倣ひ天下後進の學者が漫に口にのみ獨立を言はずして深
 く心中に之を信じ黙して之を實行上に現はさんことを願ふ者なり

文明の家庭は親友の集合なり (七)

子を養育するに父嚴母慈の語あり父は成る丈け言語容貌を嚴重にし
 て母の方は只管慈愛を専らにし緩急剛柔相互に調合して丁度適宜な
 りとの意味ならん男女の性質より論じて自から理あるが如くなれど
 も改進は人間の約束にして人文次第に進歩すれば親の子に接するの

法も次第に面目を改めざるを得ず彼の父嚴母慈の主義は男尊女卑の社會に生じたる陋習にして固より文明の家庭に行はる可らず一家の全權を擧げて主公の一身に歸し母は只子を産みて其形體を養ふの責任あるのみと定まりたる時代には父は恰も獨裁の君主にして實に子に對するのみならず妻に接しても無上の權力を振ひ子は唯家君の命に従ふのみにして一言たりとも違背す可らず時としては人情の自然利害明白にして父の本心に忍ぶ能はざる事柄にても一度口に發したる上は父たる者の威嚴に於て必ず之を斷行するの風なれば是に於てか母が竊に傍らより心配して夫れ是れと取繕ひ愛情一偏理も非も言はずして子を助くることあり父の心にも固より憎からぬことなれば知るが如く知らざるが如くにして穩に局を結び以て家庭の安寧を維持するが如きは古今の常なり是れぞ即ち父嚴母慈の眞面目なれど

も文明の社會は則ち然らず子に對して父母の權力は正しく同一様にして秋毫の輕重を見ず之に對して慈なりと云へば父母共に慈なる可し嚴なりと云へば父母共に嚴なる可し子を養育するに慈嚴緩急固より當然なれども假令ひ嚴なりと云ふも他人らしく嚴重に構へて子供を叱るにも及ばず父母の言行さへ正直清淨にして身に一點の醜穢を留めざれば家庭は恰も親友の集合にして萬年の春を楽しむ可し時に或は子供の不心得あらんか父母は其優しき中にも自から不愉快の感情なきを得ず其情發して顔色に現はるれば其顔色こそ子供の爲めには無上の苦痛即ち無上の折檻にして前非を改めしむるに足るべし或は此際にも母は女性なるゆゑ子を愛するの情も亦直接にして一筋ならんと雖も文明の教育を経たる母は假令ひ之を愛するにも自から犬の子の愛にあらず人事の利害遠近を視るの明あれば小供に説諭の法

も條理を具へて其一言は所謂嚴父が叱咤の雷聲に勝ることある可し
 左れば父嚴母慈の家庭はむかし／＼の事として今は則ち家の内に長
 少前後の別はあるも他人行儀に尊卑の階級は無益なり老人は家友中
 の長者にして年少き子女は新參の親友なり共に語り共に笑ひ共に勤
 め共に遊び苦樂貧富を共にして文明の天地に悠々たる可し

智徳の獨立 (八)

獨立は單に肉體のみに非ずして精神の獨立こそ更らに大切なれ衣食
 足りて獨立成ると云ふが如きは斷じて許す可らず抑も人を萬物の靈
 と云ふは何ぞや人間を天地間の萬物に比較して就中その精神を禽獸
 の心に比較して一種特別靈妙不思議の點あるが故なり左れば人は萬
 物中の至尊にして其言行苟も禽獸の眞似は犯す可らず否な之を犯さ

んとして自から犯すを得ず即ち人間たる者の本心なり平に云へば其
 智徳なり故に禽獸を去ることいよく遠くして人間の智徳いよく
 高し、他人に教へらるゝに非ず他人を憚るに非ず萬物に對して唯我獨
 尊なる其獨尊の精神こそ我言行の指南なれば智徳の師は近く我身に
 在て存す是即ち我輩の主義とし守る所のものにして要は唯自尊自重
 獨立して人間の本分を盡すの一點に在るのみ仁義忠孝の道美ならざ
 るに非ずと雖も特に之を徳義として特に之を尊重するは却て人の品
 位の尙ほ未だ高からざるを表するに足る可し人生本來禽獸に非ず禽
 獸を去ること甚だ遠くして高尚至極靈妙至極の位に在りと一心豁然
 として自から悟るときは不仁不義不忠不孝の如き恰も白痴瘋癲の所
 業にして之を學ぶの念は發起す可らず人が幸に白痴瘋癲ならずして
 普通の人間なればとて特に之を有徳として傍より稱譽す可きに非ず

況んや其本人に於てをや僅に仁義の道に志して物を愛し是非を辨じ
 君に仕へて忠父母に仕へて孝なれば人間の能事終るとして獨り自か
 ら安んずるが如き左りとは自から其身を視ること甚だ高からずと云
 ふの外なし人事は極めて繁多にして人生亦甚だ長し生涯無限の物に
 接し無限の事に當りて誤ることなからしむるものは唯自尊自重獨立
 の本心あるのみ之を喻へば耳に諸の音を聞き目に諸の色を見て心に
 之を感じて隨て之に應ずるの動を生ずるが如し飢寒あるが故に衣食
 を作るの法を案じ病苦あるが故に醫藥を求るの道を講じ子を産めば
 乳を授けて之を養ひ盲目を見れば方向を教へて之を導き大海の風浪
 を思ふて汽船を作り陸路の艱難を見て鐵道を工夫する等千差萬別無
 限無量その事の智たり徳たるを問はず其發して外に現はるゝは人間
 固有の本心に由來するものにして其心は他人の心に非ず本來我に屬

する獨立の心なるが故に身躬から自身の高尙靈妙なるを會心して上
 々進歩するときは人間萬事に就て拙劣鄙陋ならんと欲するも得べか
 らず彼の仁義忠孝の如き固より人事中の條項なれども特に之を勉め
 ずして自分の言行は自然に之に適し自から徳義と知らずして身は徳
 義の人と爲る可し獨立自尊の本心は百行の源泉にして源泉滾々たら
 ざる所なし是れぞ智徳の基礎の堅固なるものにして君子の言行は他
 動に非ず都て自發なりと知る可し

以上は獨立士人の眞面目を記したるものなれども滔々たる浮世能く
 此眞意を解する者は甚だ多からず啻に之を解せざるのみならず勿々
 聞て勿々誤解する者こそ多けれ例へば仁義忠孝の道特に之を勉めず
 して自然に其旨に適す可しと云へば道は修るに足らずと心得て却て
 法外に逸して其結果は遂に人心本來の靈妙を忘れて禽獸界に近づく

の虞なきに非ず是に於てか世に徳教家なる者を生じて人を教るに條
 目を設け父子君臣夫婦長幼なを夫れ其身分に就て夫れ言行
 の方針を示す其有様を俗に云へば恰も徳教の切賣するに異ならず是
 亦止むを得ざる次第にして自から世安維持の法なれども既に切賣と
 云へば全體の觀念は薄からざるを得ず譬へば汽船を造るに是は蒸氣
 に由て海上に運轉せらるゝ者なり蒸氣の力は云々風浪の力は云々と
 先づ全體の根本を胸に藏めて夫れより船體器械の各部各局に就き適
 當の構造を施して始めて大小強弱の釣合を得べし是れぞ造船學士の
 本領なれども其根本を知らずして單に局部に働くものは學士に非ず
 して職工の事なり古今無數の徳教論者は果して造船の學士にして人
 間に固有する根本の靈心に眼を注ぎ先づ其内を堅固にして然る後に
 外に應ずるの法を説きたるか或は然らずして單に職工の事を事とし

内の根本をば等閑にして専ら外面にのみ力を用ひたるの嫌はなきや
 假令ひ或は絶倫の大人が根本的自尊獨立の主義を仄に洩らしたるこ
 とあるも後世の學者輩は多くは其眞意を解すること能はずして世教
 に傳はる所には殆んど其主義の存在を見る可らざるが如し遺憾なり
 と云ふ可し

獨立の忠 (九)

人として自から禽獸に異なるを知り其精神の高尙至極靈妙至極なる
 を悟りて人間の本分に安んずるときは其靈心の發する所假令ひ自か
 ら知らざるも正しく忠孝の旨に適して其人は純粹の忠臣孝子たらざ
 るを得ず之を獨立の忠孝と云ふ例へば一國に君主を仰ぐ所以の本來
 を尋れば之を社會公心の集點と爲し不完全なる民心をして歸する所

を一にせしむるが爲めの必要に出てたることなれば(或は君主を立てざる共和政國には憲法を以て君に代ふ其義一なり)君主の地位は容易に動かす可らず時勢或は利ならずして強ひて之を動かさんとすることもあらんか君位の動搖は取りも直さず民心の動搖にして一國變亂の不幸なり斯る不幸の時勢に際して獨立の士は一身の小利害を言はずして必ず平和の方針に向ひ時としては生命財産を犠牲にしても此方針を守る可し否な單に事に迫りて然るのみに非ず其平生に於ても人心を高尙に導き苟も禽獸の真似せしむるとなくして以て社會の變亂を其未だ發せざるに豫防して世安維持の天職を勤めんとするものなれば治にも亂にも身の方針を誤ること少なし而し其士人の進退は必ずしも時の君王の嚴命に接して止むを得ず事に當るに非ず又その殊恩を蒙りて報恩の爲めにするに非ず直接の恩命如何は固より問

はずして自尊自重人たるの本分を忘れず其本心の指示する所に従ふて自から忠義の道に適するのみ忠義の心自動にして他動ならざるを知る可し古人の言に其食を食む者は其事に死すと云ふ在昔國君が國土を私有し其私有の私財を以て臣下を養ひ臣下は衣食の返禮に忠義を盡すの意味ならんれども此義果して然りとすれば其食を食まざる者は聊か不忠にても苦しからずとの意味も隨て生ぜざるを得ず左りとは治安の爲めに危険至極ならずや畢竟忠義心の發源を他動に歸して人生自尊の本來を忘るゝが故に斯る危険に陥るとなり其身既に自から忘れて進退共に他に動かさるゝとあれば忠も不忠も唯他人の言に従ふのみにして時としては大に方針を誤ることある可し例へば古來世の中に亂臣賊子甚だ少なからざる其中に眞實の野心を懷て亂賊を恣にする者あり又或は至極正直の人にして亂を起し亂に與みし

て失敗の後方向を誤りたりなど後悔する者あり本來の惡人が惡を爲すは格別なれども正直一偏の善人にてありながら敢て亂を企てゝ愧る所なきのみか生命を棄てゝも志を達せんとする者多きは何ぞや此種の人は其心事固より善にして自から忠臣義士と認め曾て心に疚しきものなきが故なり其疚しからざるは何ぞや忠義と名くる局部の教を聞き自から自身を忘れて他を仰ぎ他を信じ一切の判断を他に任じて自身獨立の思案なきが故なり古來幾多の戦争内亂に其名義は様々なれども敵味方の双方に就て見れば双方共に忠臣義士ならざるはなし恰も忠義と忠義との衝突にして其人の心事を尋れば固より同一様にして正邪は唯勝敗に由て分るゝのみ勝てば官軍負れば賊の諺は事の眞面目にして忠臣義士と亂臣賊子と其間に髪を容れず誠に危険なりと云ふ可し蓋し開闢以來今の文明の程度に於て世界萬國の人民を

平均して眞に獨立する者としては甚だ少なく隨て之を教ふるの法も亦局部を專にして徳心發起の大本を説く可らず忠と云ひ孝と云ひ恰も徳教の切賣して之を導くこそ是非なき次第なれども文明の目的は人間社會の安寧に在り其安寧の根本は人々自から其身の尊きを知りて隨て社會の利害を判断するに在り教育者德育者の深く思ふ可き所のものなり

獨立の孝 (十二)

人は本來社會的の動物にして恩を知るの本心ある者なり群居必ず相識り既に相識れば相爲めに助けんとするも人情にして助け助けられて相互に之に酬いんと欲せざるものなし或は先天の遺傳又は外物の誘惑に由りて例外の者を生ずることなきに非ざれども世界の人類を

一括して其本來如何を尋れば群居相互に助けて相互に恩を知る者なりとは争ふ可らざるの事實なり而して人智人力の働は自から限りありて遠きに及ぶ可らず文明世界の交通至便なりと云ふも外國は外國にして内國は内國なり管に内外國の別のみならず其内國の中にてても知らぬ他人あり知る朋友あり遠き親類あり近き骨肉ありて人類群居と云ひながら自から親疎遠近の別なきを得ず故に群居相助るは人間の固有特色の本心なれども其心の働く所に厚薄あるは區々たる人間の智力に限りあるが故なり博く愛するは本心にして親を親しむは人事の實際に生ずることゝ知る可し扱眼前の實際に於て我父母は如何なる者ぞと尋れば我れを産んで我れを養ひ我れを教へ我れを助け凡そ人力のあらん限りを盡して我爲めにしたる所の恩人にして他に比較す可きものはある可らず左れば此大恩人の恩を忘れずして我力の

あらん限りを盡さんとするは他に促されて始めて悟るに非ず又特に自から勉るにも非ず唯最近最親の關係よりして自然に發する所の至情のみ即ち人生本來の本心に由來する所の眞面目にして世に所謂徳教には之を孝行と名づけ一種特別の美德として稱讃すと雖も我輩に於ては尙ほ其思想の深からざるを憾むものなり父母に孝行は固より美事に相違なしと雖も其由て發する所の根本を求めれば人間の高尚至極靈妙至極なる本心に在て存す苟も其本心を我至寶として傷ることなく自重自尊大切に之を守るときは發して孝と爲り忠と爲り仁と爲り義と爲り仁義忠孝その名稱の如何を問はず凡百の德行備はらざることもなきに至る可し此邊より見れば孝も亦百行中の一にして之を喩へば人身の耳目の如し耳能く聽き目能く視るは五官中の妙用なれども單に聽視の健康を見て人身全體の如何を卜す可らず身體諸機關の

活動は其發源を生力に託す、生力盛ならざれば機關も亦衰弱す可し、本心の獨立するものあるに非ざれば仁義忠孝も甚だ危し、學者の深く注意すべき所のものなり

以上の立言は決して忠孝を輕視するに非ず、之を重ずることいよ／＼、深きが故にいよ／＼、注意を深くするものなり、近く實例を示さん、に支那朝鮮にては孝を百行の本と稱して之を言ふこと、喧しく孝の一言向ふ所に敵を見ず、人間萬事孝を以て始まり孝を以て終るの主義にてありながら、其實際の底を叩けば、世界中不孝者の多きは支那朝鮮に限ると言ふも過言に非ず、無數無量の實例を擧るは誠に容易なれども、之を略し今日近く朝鮮國王父子の間柄を見ても、證據は十分なる可し、斯る孝道國にして斯る不幸の行はるゝは何ぞや、古來孝行の解釋甚だ多くして多辯多言の中に漸く表面の儀式と爲り、偽て泣くあり、偽て拜する

あり、父母の喪に走て家に歸りて三年の喪に服し、其三年の喪中に三人の妻妾が三子を産むが如きは珍らしからぬ話にして、世間に怪しむ者もなしと云ふ、唯驚くのみ、俗諺に言葉多きは品少なしとは、此事ならん左れば我輩は固より孝行を重んずるものなれども、之を論ずるにも之を行ふにも、都て儀式的の形容を離れて、人間本來の本心に訴へ、父母に事へて華々しく邊幅を装ふが如きは、之を取らず、至親に接して至情の發するは自然のことなり、又當然のことなれば、父母に孝なれば、とて自から誇るに足らざるは、無論傍より譽るにも足らず、其譽るに足らざるは、人に耳目あるを見て驚くに足らざるが如し、孝行は驚くに足らず、驚く可きは唯不孝のみ而して、其至情の發する源泉は萬物中の至尊、又至靈たる人の精神に在て存す、故に我輩は單に外面の孝行のみを多言せずして、其源泉に重きを置き、源泉いよ／＼、深くいよ／＼、獨立して孝心

も亦これに伴ひ知らず識らず實際に現はれて裡にも表にも永久無變ならんことを願ふものなり

立國 (十一)

國民が自國の利益のみを謀て他の痛痒を顧みざるは世界公然の事實にして國交際の眞面目に義理人情なしと云ふも可なり虚心平氣大自在大公平の眼を以て觀察すれば芥子粒に等しき此地球の表面に區々たる人類が各處に群を成して國を分ち政府を立て相互に利害を殊にして相互に些末を爭ひ之が爲めには往々詐欺脅迫の事を行ふて外交政略と稱し亂暴殺人の法を工夫して武備國防と名づけ心を勞し財を費して實際に人間の安寧幸福を害し事物の進歩改良を妨げながら却て自から誇て忠君愛國など稱するこそ可笑しけれ之を要するに今の

俗世界に所謂愛國心の迷を脱して萬物の靈たる人生自然の本分を勤るに非ざれば天與の幸福大なりと雖も之を空うして徒に悲境に苦しむ可きのみ以上の立言果して違ふことなくば開闢以來今日に至るまで世界中の人民は唯相互の衝突に煩悶して死生又死生するのみ誠に憐む可き次第なれども更らに首を回らして人文進歩の實況を視れば其遅々たること驚くに堪へたり百千年來世に人傑なる者を出して一視同仁四海兄弟など唱へて仄に大同の主義を洩したるものなきに非ざれども唯是れ其人の冀望を述るのみにして實際に行はれざるのみか事は正反對にして一視同仁は扱置き世界の兄弟相接して奪はざれば奪はれ殺さざれば殺さるゝの獸劇を演ずるこそ是非なき浮世の運命なれ左れば今世の立國者が外交と云ひ國防と稱するものは所謂正當防禦の必要に促さるゝとにして即ち禽獸に接するに禽獸を以て

するの法なれば一視同仁など之を口にするも迂濶の談にして今は生存競争の四字を以て立國の格言と定めたり畢竟人文未開の然らしむる所にして個人の罪に非ず獸界の戯と云ふも可なり既に禽獸の世界に居て互に生存を争はんとするには其手段の醜美は擇ぶに違あらず或は權利義務と云ひ或は同盟義俠と云ひ所謂萬國公法の許す限りに外面を装ふて其内實は唯自國の利益を謀る可きのみ故に國民を教導するの法も自から自利一偏の主義に基き平時に於ては貿易の利を争ひ有事の日には兵馬の勝敗を決するの覺悟にして之を經濟學に説き之を忠愛論に論じて餘念あるとなし一見甚だ殺風景なるに似たれども之を喩へば醫師が病人に對して藥を與ふるに異ならず本來藥品は人身を養ふ可き性質のものに非ざれども既に病に罹れば生力の平均を得せしむるが爲めに一時の方便として之を用ひざるを得ず左れば

今日各國相對しておの／＼自から自利を主張して愛國に熱するが如き主義の高尙なるものに非ず萬物の靈たる人間には至極不似合なれども如何せん世界は恰も病人の世界にして人類の生存は僅に競争に依るのみ一切萬事の施設を競争より割出すことなれば自在大公平の眼より視て笑ふ可きもの多しと云ふも立國の實際に於ては之を一笑に附す可らず唯人間の思想は極めて靈妙深遠なりどの一義を忘れずして假令ひと口に生存競争の要を論じ又實際に之を實行するも内心深き處には病人の世界に止むを得ざるの藥品なりと獨り自から觀念して兎にも角にも思想の幅を廣くせんこと我輩の祈る所なり

思想の中庸 (十二)

人間の衣食足りて既に安心の場合に至りし上にも尙ほ欲する所のも

のなきを得ず衣食以て飢寒を免かるれば又隨て其衣食を美にせんことを欲するが如く一を得て二を求め二に達して三に進み上々際限あることなし之を熱界の野心情慾と云ふ一見甚だ厭ふ可きが如くなれども其實は決して然らず人の天性に此野心情慾あればこそ所謂文明の進歩も見る可きことなれ開闢以來今日の人文盛大に至りしは野心情慾の賜なりと明言して可なり扱その情慾とは如何なるものぞと尋ぬるに禽獸に等しき肉體の慾あり高尚至極精神の慾あり學者が讀書推理に勉強し政治家が國事の經營に苦しみ商工が營利實業に熱し小民が力役勞働するも都て生來の情慾に促さるゝことにして其慾の姿に上品下品の區別こそあれ苟も同類の人間を害するの法外に逸せざる限りは百慾皆可なり固より咎む可きに非ざれども要は誰その釣合を失はざるに在るのみ古人の云ふ中庸とは此邊の意味ならん學者の

唯

注意す可き所のものなり例へば人の習慣とあれば酒を飲むも可なり酒は百藥の長と云ふ之を飲食の補助品として用ふるときは自から功能なきに非ずと雖も鯨飲酪酊他の飲食に比較して平均を失ふは宜しからず既に平均を失へば有害は酒のみに限らず百般の菜肉皆同様にして無毒と稱する米の飯にても單に之を過食すれば則ち毒物となる可し啗に飲食のものゝみに非ず學者政治家の流が心を勞すること分に過ぎて身體の運動を怠り鬱散の快樂を忘れて遂に病に犯され短命に死するが如きも苦樂の平均を誤るの罪なり又近く今日の富豪界に就て類例を示さんに商工社會有爲の人物が熱心經營して利を謀るも人間の慾にして固より可なり其經營宜しきを得て身を立て家を成す更らに甚だ美なり扱その立身成家の後も亦本來の慾情即ち好事心は尙ほ止む可らずして種々様々に思ふこともあらん爲すこともあらん

固より人々の自由にして傍より喙を容る可きに非ず、家屋庭園の壯觀、書畫骨董の珍奇、知友相會して花鳥風月に遊び、絲竹管絃を弄ぶが如き、自から上流士人清閑の快樂事にして甚だ妙なりと雖も、其事の眞面目を叩けば畢竟一身一家の内に屬して、單に私の好事心を慰むるに過ぎず。若しも其士人が更に眼界を遠くして、戸外を通覽したらんには、辛苦散財以て更に大に好事心を飽かしむるの區域甚だ廣きを發見す可し。例へば宗教に助力して衆生の徳心を維持す可し、學校に資金を投じて教育を奨勵す可し、或は病院を助け貧院を惠む等、その事は枚舉に遑あらずして、富豪社會の爲めに謀れば心を勞し財を散じて成跡のなるものを見る可き、屈強の場所なり一家の内を盛にするも、戸外公衆の利益を謀るも共に是れ一身衣食以上の事にして必ずしも人に促さるゝに非ず、俗に云へば人々の道樂にこそあれ既に道樂とあれば一家

の道樂と戸外の道樂と是れ亦相互に平均し、其中庸を得て始めて社會の美事と云ふ可し。然るに今の實際を見れば、彼の富豪流が立身成家と共に私の物數寄に熱し、衣服飲食、家屋庭園等様々に辛苦して時に或は一擲千金の愉快を羨にし、ながら公共の爲めに云々と聞けば、百圓の金も出納に吝なるのみか、自家の子弟の教育に錢を愛しむ者さへなきに非ず。散財の不釣合も亦甚だしと云ふ可し。尙ほ甚だしきは純然たる洋學社會の人が、内國に學び又外國に遊學して成學漸く頭角を現はし、相當の地位を得て相當の家を成したる處にて、従前は貧乏にて百事不如意なりしが、今は多少の家産もあり必ず何か學事に盡すこともある可し。など世人の竊に豫想する所は、案に相違し、洋學先生の囊中漸く温なると同時に、漸く物數寄の熱を催はし、古物尊ぶ可し、古器古書畫愛す可し、插花の優美、茶の湯の閑雅、謠曲の高尙、義太夫の風流等、自から日本

特色の美術にして之を西洋諸國の殺風景に比すれば同日の談に非ず
 など稱し分別盛りの大人が小兒の戯に狂して竊に文明の極意を氣取
 るこそ可笑しけれ思ふに彼等の文明思想は漸く佳境に入て其實は却
 て佳境を通過し玄之又玄に達して遂に玄妙幽微の邊に消滅し去りた
 るものなる可し文思既に去れば讀書研究の念なきも自然の結果にし
 て先生等の近況を窺ふに爾來兎角多忙にして洋書を繙くの餘暇なし
 と云ふ斯くては廣く世間一般の學事に心を寄せて斯道の推進を謀る
 が如き殆んど餘處の事にして今は則ち心身共に學界を脱したるもの
 と云ふも不可なし歐米社會の大人は劇務に忙しくする其忙中尙ほ書
 を讀み理を講じて世の爲めにするの常なり在昔米國のフランクリン
 は獨立前後の騷亂中に理學上の發明して學術社會を益し今の英國の
 グラッドストーンは八十歳の身を以て政論に縁なき宗教論を記した

ることあり尙ほ下りて取引所の仲買が教育論を論じ吳服屋の主人が
 物理書を著述するが如き散て稀有の談に非ず畢竟文明國人の胷中餘
 暇を存して少小の文思常に身を去らざるものと云ふ可し左れば彼等
 が少小の時より辛苦洋學を勉めたる其洋學は恰も是れ尙古風の東洋
 男兒に着せたる文明の鍍金に異ならず身を官民の實務社會に出し俗
 事俗情以て之を磨按すれば鍍金は忽ち剝脱して本來の古臭を放ち臭
 氣紛々人の嘔吐を促がすこそ是非なき次第なれ斯く云へばとて吾々
 も共に日本國民にして固より概して我舊を排斥するに非ず舊套古事
 古物の中自から取る可きものあるは分り切たることにして此邊の取
 捨を知らざるに非ずと雖も新開國たる日本の今日は正に新文明の經
 營に忙しく之を先導して至る所に至らしむるは文明學者の天職にし
 て畢生の力を以て眞一文字に進むも尙ほ及ばざるを憂ふる此大切な

る場合に學者輩が進歩の勞に堪へずして途中に挫折し却て自から小兒の戯を演ずるが如き思想の不公平にして事物の緩急輕重を誤るものと云ふ可し

人に交るの法易からず (十三)

一言の用法甚だ大切にして或は卒直缺禮以て人を喜こばしめ或は態と丁寧にして却て客の不愉快を致すことあり實際に何も益することなくして他を喜憂せしむるは智者の事に非ず士人の注意す可き所のものなり今はむかし四十餘年前のことなりしか諭吉の年二十三歳の頃大阪遊學中豊前中津に歸省して居ること一兩月將さに再遊せんとするに臨み或る同藩士の家を訪ふて暇乞せしとき其藩士は上流故老の人にて四方八山の談話終り左様ならばと座を立つとき主人言葉を

改めて言ふやう貴様も大阪にて勉強今又再遊とは感心の事なり今日は破格の禮を以て玄關まで送らんとて敷臺の處まで送りたり蓋し主公は藩中の上士族にして小士族なる少年の客を玄關まで送るは實に藩風破格の特禮なれば大に持成しの意ならんなれども諭吉は特にありがたうとも伺とも言はずして別を告げ歸路不愉快に堪へず藩の成規にて上士が以下の者を送るの例なしとならば送らずして可なり今日態と例外に送りたりとて是式の戯を演じても諭吉の身は輕重するに足らず詰り人を愚弄したる舉動なりと心の中に之を含み事の次第は固より他に公言せず家に歸りて母にも語らざりしかども獨り不平にして種々様々に考へたることあり又東京にて明治三年諭吉が劇症の熱病に罹りて幸に全快の後醫師を始め看病を煩はしたる親友を招待し一席の宴を設けて病中無量の厚意を謝し且つ飲み且つ語りて自

から愉快の折柄一醫の言ふに今度の御全快は實に目出度し拙者は病
 用にて毎度岩倉公に伺候する其時に公も當主人の病症を御尋ありて
 痛く御心配の様子なりしが兎に角に當今の貴顯方まで病の安否を御
 心配とは先づ以て名譽の御事で御座る云々と述立るを聞て病後の諭
 吉はムツト心に立腹し岩倉とは抑も何者ぞ従前曾て相見ざる人なり
 (其後は度々面會したれども病前は一面識なし)見たこともなき他人が
 此身の病氣に就て囁きたりどて是れが名譽とは何事ぞ畢竟するに軟
 骨無腸の醫者輩が時の大臣の一言を金玉の如くに拜する其根性を以
 て此身を測量するに過ぎず聞くも穢はしと敢て口にも言はず顔色に
 も現はさずして事は濟みたれども満座の中主人獨り不愉快を感じた
 ることあり以上は諭吉が少壯時代の事にして今日より靜に考ふれば
 必ずしも相手の人を咎るに及ばず固より其人の惡意ならざるのみか

好情に出たることにして之を怒る者こそ却て無法なれども少壯の血
 氣斯く靜穩なるを得ずして苟も意に適せざれば怒るの常なり諭吉は
 幸に其怒を吞むの常なりしが故に曾て他人と爭論したることなけれ
 ども其怒を内に吞むと外に發するどに拘はらず人生の感情は意外微
 妙の邊に動くものなれば人に交るの法易からずと云ふ可し

名譽 (十四)

名譽は人の重んずる所にして財産よりも更らに大切なり大切なるが
 故に之を得るの法も亦易からず凡そ何ものにてても之を求むること直
 接にしていよく急なれば之を得ることいよく難きの常なり例へ
 ば商賣人が利に走ること急に於て煩悶するときは何時も失敗して
 其商賣の中りは却て意外の邊に在りと云ふ其意外の利とは初めより

利を期せずして恰も之を度外に放棄したる其事より大利益の生ずることとなり人間世界有形の商賈にても斯の如し況んや無形微妙の名譽に於てをや直に求めて直に得べからざるは無論之を求むることいよ急にしていよ煩悶すれば却て反對に既有的名譽をも損するに至る可し名譽は喩へば金箔の如し木像なれば塗師屋の箔にて直に光を放つ可しと雖も人間の金箔は塗師屋の手に叶はず主人自から勤む可きを勤めて居家處世の義務を盡し然かも其これを勤むるや單に自尊自重自から爲めにし人たるの本分を守るのみにして一身の名譽如何に至りては之を度外に放棄して恰も忘れたるものゝ如くなれば其自から忘るゝことこそ他に知らるゝの原因にして遠近の尊敬名譽は自然に其人に歸して光明却て金箔に優ることある可し之を求めざるの名譽と云ふ又世間には天爵人爵の議論喧しく一方に人爵を拜す

る者あれば他の一方には之を悦ばず人爲の爵位取るに足らずとて口穢く之を排する者なきに非ざれども其排斥論も一概に感服す可らず天爵にても人爵にても自然に其人に歸する名譽なれば傍より尊敬して可なり天爵貴しと云ふも其天爵者が拙者は有徳有智の君子なりと云はぬばかりの顔色して交際社會に出没するときは其爵位は同時に剝奪せられたる者なり人爵亦斯の如し左したる價もなき男が何かの機にて華族となり又は久しく官員を勤めて位記を貰ひなどしたる者が世間に交はりて兎角横風なればこそ可笑しけれ官界自から人物なきに非ず自ら名譽の歸す可き筈なれば其自然の名譽を爵位の姿にして之に授けたりとて世間に何も不平はある可らず唯政府は爵位の製造所にして手製の名譽を俗輩の玩弄物に供するが故に腐臭に蠅の群集は自然の勢にして塗師屋の金箔は本地の如何を問はず朽木も名木

と共に一樣に光を放て眞偽を分たず遂に一樣に偽物視せらるゝのみ

禍福の發動機 (十五)

一顰一笑能く人の心を動かして時としては社會禍福の原因と爲るとあり老嫗の一言を聞いて其村の家を焼かず一村民の奸策を怒て群民を屠殺したるが如きは往々軍談に聞く所にして又支那の戰國時代に秦の宰相范雎が立身の後一飯の徳も必ず償ひ睡眠の怨も必ず報ゆと云ふが如きも都て因小果大の事實を示すものならん今余が身に就ても之に類する奇話こそあれば其次第を語らんに余は元と舊中津藩の小士族にして生來藩風の窮屈なるを悦ばず藩士の家に生れて却て自から藩士の身の境遇を厭ひ弱冠にして洋學に志し長崎大阪に遊學して後に江戸に來りしは年二十五歳の時なり夫れより米國に行き又歐

洲に行き學業も漸く進歩すると同時に親しく歐米諸國文明の活劇に接して欽慕に堪へず就中その人權を重んずるの一事は封建制度の門閥風に呼吸したる日本人の夢にも想像せざる所にして眼前に之を見れば唯茫然として心醉するのみ(佛蘭西滞在中巴里にて書籍を買ふとき其書林の主人は時の國務大臣某氏の實弟なりと聞き左れば日本江戸の書林須原屋茂兵衛は御老中何の守様の弟なるが如し扱々不思議のことともある哉とて同行の人々に語り共に驚き且つ感動したることあり)歸來舊に依て書を読み又著書翻譯の事に忙しくするも社會全體の爲めに期する所は門閥打破の一事にして學友談笑の間にも之を聞かざるはなし殿様と云へば暗弱我儘者の異名にして國家老と云へば老大愚鈍を意味し徳川將軍を始めとして所謂旗本八萬騎は八萬の殼威張り弱武者として之を嘲り之を厭ふと雖も學者社會には多少の思

慮分別あると同時に冒險自から事を擧るの膽力勇氣なく唯竊に危言して云はゞ手を袖にして間接に變亂を教唆するの有様なりし其中に明治維新の世の中と爲りて維新勿々門閥廢止の端緒を開きたるこそ千載の大愉快なれ當時洋學者流の心事を形容すれば恰も自分に綴りたる筋書を芝居に演じて其芝居を見物するに異ならず固より役者と作者と直接の打合せもなければ双方共に隔靴の憾はある可きなれども大體の筋に不平を見たることなし斯くて新政府は門閥廢止の主義に基づき太政官を置て攝家關白などの舊制度を廢したれども三百の大名は依然舊の如し此時に當り阿波藩の一友(しかど覺えざれども高畠五郎なりしと思ふ)余に告げて足下は試に我藩の主人公に面會する氣はなきやと云ふに答へ僕は從前自分の藩に居てさへ藩主へは唯一兩度例の御目見したるのみにて親しく談話せしことなし全體僕の生

來大名は嫌にて誰れにも餘り多く面會せざれども今足下の云ふ阿波公は大藩主にして然かも將軍の孫ならずや如何なる人間ならん之を見るとは面白しとて兎に角に紹介を頼み其後或日を期して當時の阿波藩邸なる一橋に推參したるは明治元年か二年の頃なり玄關にて取次を申込み奥の廣き座敷に通ひて始めて面會したるは藩の殿様にして年齢二十餘りの貴公子なり固より少年のことゝて何も取留めたる話はなければ余は話すよりも始終その殿様の言語動作に目を注ぎ旨く誘ふて様々のことを發言せしめ能く之を見れば如何にも無禮横風なる少年にして曾て人に交るの法を知らず書生同士の附合なれば一言馬鹿と評し去るの外なし又左右に附添ふ家來の人々が之に仕へて膝行平伏する其風體も見るに堪へず余は心の中に冷笑しながら丁寧挨拶して別を告げ家に歸りて獨り思案を運らし天下の大名

その無狀たるは獨り阿州の若殿に限らず都て是れ三百年の遺傳惡習慣に養はれて腐敗を極めたるものなり此輩をして全國の各地方に君臨せしむるは人類にして豚犬の命令を奉ずるに異ならず徳川の中央政府も既に亡びたり此勢に乗じて眞成の文明を日本國に入れんとするには吾々洋學者流の持論たる門閥打破の主義を擴め徳川と共に諸藩をも亡ぼして大名國家老の權力を根底より奪却す可し云々として恰も持論の論鋒を新にして之を同友知人に語れば一人として不可を云ふ者なく之を論じ之を説き遠近相通じて漸く佳境に入る其論說の中に彼の若殿の横風なる實事談を例に引て毎度人心を激したるは今に記憶に存する所なり其後數年ならずして政府の大膽政略以て廢藩置縣の大事を斷行し却て學者社會の意表に出で、却て之を驚かし更に一言の言ふ可きものなからしめたるこそ古今の一六盛事なれ當時

吾々同友は三五相會すれば則ち相祝し新政府の此盛事を見たる上は死するも憾なしと絶叫したるものなり扱三十年後の今日となりてつら／＼往事を回想すれば吾々の執て守る所の主義如何は姑く擱き其舉動やゝもすれば感情に制せられて極端に走りたるこそ今更ら耻かしき次第なれ余が阿波藩主に始めて面會して其無禮を怒り黃口の孺子愚鈍妄慢斷じて事を託するに足らず此種の三百大名を一掃すべしと竊に力を込めて知人の間に論談したる其孺子も三年立てば三歳兒に爲るの諺に洩れず次第に成長すれば滿更の愚鈍ならずして或は公使と爲り議長に選ばれ又國務大臣にも任ぜられて立派に一人前の人物なりと云ふ前言の餘り過激なりしを知る可し左れば當時余が熱心に論じたる大名一掃の議論を以て廢藩前後に萬分一の効力ありしものと假定すれば其議論の宿昔の志に相違なけれども偶然阿波藩主の

無禮横風に促がされて更に機を新にしたるものなるが故に奇言を以て事を大造に云へば廢藩成功の一部分は阿州青年の賜と云ふも不可なし奇に非ずして何ぞや唯この事が社會の利益に關係したればこそ幸なれども若しも之に反して何かの禍源と爲りしことあらんには當時の阿波藩主又たこれに接したる福澤諭吉も今更ら徳義上に於て申譯ある可らず人間の一聲一笑輕々に附す可らざるなり

貧書生の苦界 (十六)

文明の發達は寒國に在り成業の大學者は貧家の子に限ると云ふ歴史の示す所に従へば自から事實なるに似たれども寒國の萬事不自由なるが爲めに人をして活潑ならしめ貧乏の身に苦しきが爲めに少年をして勉強せしめ其活潑勉強の結果却て意外の効を奏するのみ寒貧を

以て直に事に利ありとするは道理に於て大間違ひの話なり一國社會の殖産を進めて富強を致さんとするには天然の熱を利用して之に人智を加ふるの便なるに若かず少年學者の學業を助けて有爲の人物たらしめんとするには不自由なく學資を給して心身を學問の一方に専らにせしむるより善きはなし然るに今日の實際に於て其反對を見るは暖國人が其天與の幸福に慣れて懶惰に陥り富家の子が家産の豊なるに乗じて不勉強に流るゝが故なり本來別種の問題にして別に思案する所ある可し左れば今世間の父兄が相應の財産家にてありながら子弟を警しむるに動もすれば既往歴史上の事例を持出し書生なる者は貧乏にして始めて業を成す可しとて能く之に學資を節して不自由を覺えしめ隨て不振生を犯さしめ甚だしきは學問修業をば價の安きものと心得月謝金の高低をまで計算するものなきに非ず畢竟此流の

人々は身躬から貧書生の苦界を知らず其苦界に資金の豊なるを得れば何等の利益ある可きやを知らずして漫然唯錢を吝しむのみ奇話を用ふれば學問知らずの盲客と云ふも可なり數年前余が家の紀念の爲に私に記したる築城書百爾之記あり都て余が私に關することなれども之を一讀して自から貧生の苦痛は知るに足る可し

築城書百爾之記

福澤諭吉生レテ二十一歳(實ハ十九歳三箇月)即チ安政元年寅三月故郷ナル豊前中津ヲ去テ長崎ニ行キ始テ荷蘭ノ原書横文ヲ學ブ家素ヨリ貧ニシテ學資ヲ得ザレバ當時在崎中津藩ノ重臣奥平壹岐ナル人ノ周旋ニテ或ハ寺ニ寄食シ(長崎桶屋町眞宗光永寺)又或ハ流行ノ砲術家ニ食客ト爲リ(長崎小島町地役人山本物次郎)僅ニ口ヲ糊スル

大井

ノ有様ニシテ横文ヲ學ブトテ定リタル師家ニ入門スルコトモ叶ハズ時トシテハ蘭學醫ノ玄關ニ至テ其門弟子ニ素讀ヲ受ケ(蘭醫ハ石川櫻所榎林健吉松崎昇甫其外ナリ)又或ハ荷蘭ノ通詞榎林榮七等ニ依頼シテ其閑暇ノ時ニスベルリングヲ學ブ等甚ダ不自由ナリキ長崎ニ居ルコト一年、安政二年卯三月久シク寄食ノ恩ヲ受ケタル砲術先生山本物次郎ノ家ヲ辭シテ東上、直ニ江戸ニ赴クノ志ニテ大阪ニ至リシ處タマ、家兄在阪、中津ノ藏屋敷ニ在リ強ヒテ東上ヲ留メテ大阪緒方洪庵先生ノ門ニ入ラシメタリ緒方先生ノ門ニ居ルコト一年、安政三年辰ノ春ニ至テハ學業モ稍ヤ上達ヲ覺ユ然ルニ同年三月熱病ニ罹リテ頗ル危險、五月下旬家兄ト共ニ中津ニ歸リタリ此時兄モ「レウマチス」症ヲ煩ヒ兄弟共ニ病患衰弱ノ體ヲ以テ二箇年離居シタル老母ニ對面シタルハ一喜一悲甚ダ

憐レナル景况ナリキ

中津ニ歸省シテ病後ノ養生凡二箇月同年七月初旬復タ大阪ニ行キ
就學僅ニ二箇月ニシテ九月中旬家兄ノ凶音至ル遽テ家ニ歸レバ則
チ親戚ノ取計ヒニテ諭吉ハ既ニ已ニ福澤家ノ相續ニ定リタリト聞
キ且悲ミ且驚キ又大ニ失望シタリ心緒亂レテ麻ノ如シ
既ニ福澤家ノ相續トナリタル上ハ藩法ニ從テ家督無相違被仰付俗
吏ノ末席ニ奔走セザルヲ得ズ親戚朋友ハ皆目出度シト祝スルノミ
ナレハ諭吉ニ於テハ遊學讀書ノ念勃トシテ自カラ禁ズル能ハズ身
ハ中津ニ居テ心ハ天外ニ在リ身外皆敵ノ如ク闔藩共ニ語ル可キ者
ナシ此間僅ニ二箇月餘ナリシカドモ畢生ノ不愉快ハ此日月ニシテ
今尙ホ忘ル、能ハズ

當時曩キノ奥平壹岐モ歸省シテ中津ニ在リ或日諭吉其家ヲ訪フテ

語次蘭學ノ事ニ及ビ主人一冊ノ蘭書ヲ出シテ是レハ過日長崎ニテ
價二十三兩ヲ以テ購得タル新舶來ノモノナリトテ示シタリ諭吉取
テ之ヲ見レバ百爾氏ノ築城書ニシテ生來初テ目撃スル兵書ナレバ
心竊ニ羨マザルヲ得ズト雖モ當時ノ廿三兩ハ中人十家ノ産貧小士
族ノ想像ニモ及バザル大金ニシテ固ヨリ私力ヲ以テ別ニ買得ベキ
品ニ非ズ或ハ暫ク之ヲ借用シテ讀マントスルモ平生壹岐ノ性質ニ
於テ又諭吉ト同人トノ交情ニテモ決シテ其肯セザルヲ知レバ態
ト發言モセズ唯茫然トシテ其原書ヲ手ニ持テ繰返シ眺ル許リ
ナリシガ頓ニ一策ヲ按シテ主人ニ向ヒ誠ニ生來初見ノ寶書全編通
覽ハ敢テ望ム所ニ非ズ何卒其目次大意ニテモ心得居リ度歟テハ甚
ダ申上兼ル儀ナレドモ五六日拜借ハ相叶間敷哉ト折入テ懇願シタ
ルニ主人モ氣ノ毒ニ思ヒシニヤ然ラバ五六日トテ貸渡シタリ諭吉

恰モ龍宮ノ珠ヲ得タル心地シテ走テ家ニ歸リ即刻筆紙ヲ用意シテ
 寫本ニ取掛リ終日終夜手ニ筆ヲ放タザルコト半月餘ニシテ二百丁
 許リノ原書ト圖面二葉トヲ寫取リタリ其間ハ一切來客ヲ謝絶シ或
 ハ當時藩ノ公用御固番トテ城ノ見付ニ當直スルコトモアレバ番所
 ニ筆紙ヲ持參シテ夜更ケ人定マルヲ時トシテ業ニ就ク等極メテ秘
 密ニシテ曾テ人ノ知ル者ナシ唯母ハ其舉動ノ非常ナルヲ察シ毎夜
 不眠ハ不養生ナリナド戒メタルコトモアリキ寫字終リ扱校合ノ一
 段ニ至テ一人ノ手ニ叶ハズ當惑ノ處幸ニ同藩ノ醫師藤野啓山ナル
 者少シク蘭字ヲ知り兼テ懇意ナルニ付夜分窮ニ藤野ノ宅ニ行テ原
 寫ノ讀合セテ依頼シ三五回ニシテ終リ前後凡二十日間ニシテ偷寫
 ノ事全ク成リ其時ノ愉快譬ヘンニ物ナシ乃チ平氣ノ顔色借用ノ原
 書ヲ奥平ニ持參シテ先ヅ一禮ヲ述ベ返却延引ノ旨ヲ謝シタルニ流

石如何ナル主公ニテモ細密ナル一部ノ蘭書ヲ人ニ貸シテ僅ニ二十
 日間ニ寫取ラレタラントノ疑念ハ萬々アル可ラズ穩ニ會釋シテ相
 別レタリ此一事誠ニ陰險不良ノ舉動ニシテ道德上ニアルマジキコ
 トナレドモ壯年血氣ノ貧書生一時ノ熱ニ乗ジタルモノナラン今ニ
 シテ考フレバ貧ハ人ヲ不善ニ導キ究ハ人ヲシテ活潑ナラシムルノ
 一例トシテ見ル可キノミ
 此原書ノ寫取ヲ以テ尙ホ足ラズ翌安政四年巳ノ早春大阪再遊ノト
 キ寫本ヲ携ヘテ緒方ノ塾ニ入り課業ノ傍ニ翻譯ヲ試ミ數月ニシテ
 全部六冊脱稿即チ此百爾ト題スル翻譯書ニシテ其寫本モ繪圖モ論
 吉ノ自筆ナリ蓋シ本人ガ洋書ヲ學デ第一着ノ事業トス左レドモ當
 時ノ時勢固ヨリ譯書ヲ出版スルノ念モナク又其方便モナク唯二三
 ノ朋友ニ示シタルマデノ事ナリ

翌安政五年午ノ冬、江戸ノ藩邸ニ召サレタル時ニモ右ノ原本譯書共ニ携來リテ時アレバ當時ノ砲術家ナドヘ示スノミノ事ニテ何ノ用モ爲サバリシガ此時鐵砲洲ノ舊藩邸ニ小塾ヲ開キ其生徒中ニ伊勢津ノ藩士米村鐵太郎ナル者アリテ同人ハ其藩ニテ專ラ兵制ノ事ニ關係スルト聞キ其歸藩ノトキ原譯書ヲ併セテ之ニ贈リ福澤ノ家ニ遺ルモノナシ一度ビ辛苦シテ人ノ物ヲ偷ミ又コレヲ漠然人ニ贈リタルモ書生ノ境遇淡白ナル次第ナリ

明治十四年夏、伊勢山田ノ舊知人古田杏祐出京來訪ノトキ不圖前年ノ事ヲ想起シ今日米村ハ何處ニ在ルヤ二十餘年前斯クノ原譯書ハ今尙ホ其家ニアル可キヤ若シ之アリテ目今不用ナラバ返却ヲ乞フテ福澤ノ紀念ニ存シ置キタシ云々ト語リシニ古田歸郷ノ後川北元立是レモ伊勢人大阪緒方塾ニテ同窓ト共ニ周旋探索シテ米村

ノ所在ヲ發見シ翻譯書六冊ト原圖二片トヲ送致シタリ(此圖ハ原寫本ニ付ク可キモノナレドモ翻譯書ノ圖ト間違ヘタルコトト見ユ)實ニ明治十四年十一月十四日ノ事ナリ奇遇ト云フ可シ但シ横文ノ寫本ハ先年舊津藩ニ納メタリトテ之ヲ得ズ、嗚呼舊ヲ懷ヘバ一夢ノ如シ曩ニ中津留主居町ノ茅屋ニテ此原書ヲ寫シ翌年大阪緒方ノ塾ニテ翻譯シタルハ諭吉ノ齡二十二三歳ノ時ニシテ今ヲ去ルコト二十五六年ナリ人生老スルニ從テ懷舊ノ情切ナルヲ覺ユ依テ事ノ顛末ヲ記シテ此寫本ニ附ス明治十四年十一月十八夜東京三田福澤諭吉

記

當時余が珍らしき原書を一見して羨ましきに堪へず一寸これを借用して竊に寫本に取掛り二十日ばかりの間殆んど一目も眠らずして偷取したる其苦勞は實に名狀す可らず兎に角に不正の所業殊に小身者

が大臣を欺くあそむの罪なれば人に知られては大變なり又寫本の半に原書返却へんきやくの催促さいそくに逢ふても半の徒勞どらうなりなど、夫れ是れ思廻おもひまわはして不眠ふみん執筆しつひつの辛苦しんくと共に更らに大に心を勞し幸にして首尾しゆび能く目的もくてきは達したれども退しりぞて考ふれば此時に二十三圓の金さへあれば斯る危険きけんを犯すに及ばず別に長崎に注文ちゆうもんして同様の原書を買ふ道もありしならん事の原因げんいんは唯福澤の家の貧ひんに在るのみ尙ほ此外にも貧書生の悲かなしさを計ふれば貧の爲めに過勞くわらうし貧の爲めに業を中止ちゆうしし貧の爲めに粗食そしょくし貧の爲めに病やまひに罹る等無限無量の惡事殆んど枚舉まいきよに遑いとまあらず誰れか貧乏は書生の藥なりといふ余は正反對せいはんたいに書生の學業進歩がくぎやうしんぽを妨さまたぐるものは貧乏より酷こくなるものなしと明言めいげんする者なり世間多少の財産家さいざんかにして子弟しよていを教育けいようせんとならば平生へいせいその家風かふうを美びにして先づ少年の徳心とくしんを養やしなひ其法外はふぐわいに逸するを留めて干涉かんしやう又干涉すると同時に苟いさしくも學

事に關する費用ひようぎんは思おもひ切きて豊ゆたかにせんことを祈いのるものなり

物理學 (十七)

竊ひそに案あんずるに今の文明學ぶんめいがくを文明として之を和漢わかんの古學に比較ひかくし兩者相互さうごに異なる所の要點やうてんを求めれば單に物理學ぶつりがくの根本こんぽんに據ると據らざるとの差違ささあるのみ宇宙自然うちうしぜんの眞理原則しんりげんそくに基づき物の數と形と性質せいしやうとを詳こまにして其働このはたらきを知り遂に其物を將て人事じんじに利用するもの之を物理學ぶつりがくと云ふ故に物理の學たる千萬年の古より千萬年の後世こうせいに至るまで世界せかいに通じ宇宙に達して變換へんくわんあるなし唯人智じんちの進むに従ひ古來こらいの未發みはつを發明して以て其學域がくぎを廣くするのみ然るに今有形の物理ぶつりを去て無形むけいの論理ろんりに入れば其論ずる所常に同むからずして時代と共に改あらたまり場所ばしょに従て變化へんわし昨非さくひ今是一得いとく一失いしつ殆んど定まる所なし例へば政

治經濟又道德論の如き古人の仁政として仰ぎしものも今世は壓制として人の厭ふ所と爲り此國は自由貿易を以て至善の經濟法と認め彼國は保護法に由て民利國益を謀り耶蘇教國の人は儒佛敎民を無徳と稱し儒佛の人は耶蘇敎の非を鳴らして止まず嘗に世界の全體に於て然るのみか一國一時の局部を見ても前後齟齬するもの甚だ少なからず近くは政府の方針を新にすと云ひ法律規則を改革すと云ひ從て改めて又隨て之を廢し時としては前年既に厭ひし其舊に復することさへなきにあらざる畢竟無形の論理に一定の標準なき明證にして此一段に至りては西洋の文明論も和漢の古學論も時としては是非得失を斷ずること易からず今の世の洋學者が韓非子を讀で之を悦び太宰の經濟錄、中井の草茅危言を見て取る可きあるを稱するが如き其例として見る可し之を喩へば醫療に於て内部無形の變態を診斷するは西洋醫

も古流醫も殆んど彷彿たるものありと雖も苟も醫學上有形の方便の達する所に至りては洋醫獨り明ありて古流醫は盲者に異ならず醫術の結局外科より進歩す可しとは識者の言にして其有形の方便は即ち物理學の區域に屬するものなり左れば物理學は自然の眞理原則に基づき天地と共に永くして萬物を包羅し至大至廣、最貴、最重、人生の須臾も離る可らざる所に於て條理の漸く明かなるに従ひ政治經濟等今日無形人文の漸く進歩して條理の漸く明かなるに従ひ政治經濟等今日無形の人事と稱するものをも遂には物理の中に攝取して洩らさるに至る其趣は醫學の日に進歩して有形の方便を利用し其用法漸く發達して遂には内部百般の病をも外科の門に統御すると同一様の成跡を見るの日ある可し

物理學の廣大貴重なること右の如くにして幸なるは我日本國の新文

明が始めて入來したる其路を尋るに正に此物理の門よりしたるの一事なり支那の如きは其外交の年久しきにも拘はらず西洋文明の新原素を輸入したるは國民中最下等の商民社會よりして當初既に文明の重きをなさず今日に至るまでも尙ほ其進歩の滑なるを得ざるこそ氣の毒なれども是れは他國の不幸として捨置き獨り我國に於て文明の入門甚だ高尙なりし其由來を爰に略言せんに足利の末年に行はれたる外交の事は姑く擱き徳川政府鎖國の政略は名實共に眞の鎖國にして外國の事情を知るに由なく長崎の通詞にても唯彼の詞に通ずるのみ讀書は都て禁制なりしを享保年中始めて許されたる程の次第にして國中の學者社會に洋書など讀む者としては一人もなかりし其時代に當り不思議なるは在江戸奥平藩の醫士に前野良澤なる人ありて蘭化と稱し寶曆明和の際(西洋紀元千七百六十三四年の頃)始めて蘭書を讀

むことに志を起し其後若州酒井藩の醫士杉田玄白先生(鵜齋と號す)も亦これに志し同志三四名相謀りていよく蘭書を解して事實に利用せんとて蘭化先生を盟主と仰ぎ江戸鐵砲洲奥平藩邸内先生の宅に會してターフルアナトミカと題する和蘭刊行の解剖書を繕きたるは明和八年三月五日のとなり(一千七百七十一年)辛苦勉強漸く其義を解するに従ひ鵜齋先生は翻譯に着手し四年の間に十一度草稿を替へて遂に上木したるものは解剖新書なり(事は蘭學事始に詳なり)實に我日本開闢以來の大事業にして天下後世の爲めに文明入門の道を開きたる先人の刻苦忍耐は云ふまでもなく特に迂老の大切に思ふ所は其の入門の道を物理學よりしたるの一事に在り百千年來和漢の古流醫が物理を知らずして陰陽五行の妄説を守り曾て疑ふ所なかりし者も新書翻譯の一舉に由て頓に迷夢を破られたることなれば當時の醫流にし

て苟も氣概ある者は靡然として實學の風に歸せざるはなく以て蘭學の
 一門流を樹て爾來幕府の末年に至るまで凡そ百年の間に續々輩出
 したる大家には大槻、宇田川、坪井、箕作、第二三世の杉田、伊東、川本、戸塚、林
 等の諸先生ありて江戸に門戸を張り京都には新宮、小森等あり大阪に
 は緒方の一門あり或は醫を業とし或は讀書翻譯を勉めて出版の書甚
 だ少なからず何れも皆醫書にあらざれば格物究理化學本草等の書に
 して皆に醫術に利するのみならず其勢力は廣く上流の學者社會に波
 及して凡そ荷蘭究理の説とあれば古流の老儒碩學と雖も容易に之に
 抗するを得ず唯蘭學門流の少數なるが爲めに表面には俗世界に擯斥
 せられたるが如くなれども其實は既に已に日本上流の有力なる部分
 も征服したるものと云ふも可なり如何となれば世に守舊頑固の士人
 多しと雖も苟も其人に知識分別の明ある者は眞理原則の爭ふ可らざ

るを悟りて忽ち物理學の良友となり一度此物理の門よりして文明
 に入るときは其志復た動す可らざればなり我文明の基礎堅固にして
 其由て來る所高尙なりとは實際の事實に證して疑ふ可らず假に徳川
 の時代に西洋の文明を入れんとして其方便を物理學に求めず却て政
 論商論經濟論等人事無形の論理を以てして其書を譯し其説を唱ふる
 か又は下流細民の内外交際より彼の新事物を輸入し來るが如きあら
 んには初めより之を蔑視して顧みることなきに非ざれば新舊の兩論
 相互に激して由々しき大事を醸し洋學の運命も必ず斷絶したるや又
 疑を容れず然るに實際は之に反して初めは醫學よりして漸く物理の
 區域に發達し到る處に敵を見ずして却て有力なる友を得たるこそ幸
 なれ先人偶然の發意に出でたりとは雖も之を物理學の功德と云はざ
 るを得ざるなり

前陳の如く我文明は物理學の門より入り明和年中より幕府の末年に至るまで凡そ百年の間究理書類の著譯甚だ少なからずと雖も鎖國政治の下に居て外國人に接するを得ざるは勿論彼の國の著書を得ることさへ容易ならずして之が爲めに我學術の地位は高きに達するを得ず之を迂老が身に徴しても大概を知る可き事實こそあれば爰に其一事を記さんに弘化嘉永の頃蘭學塾の盛なるは大阪に在る緒方洪庵先生の門にして迂老も其塾に學びたる者なるが當時塾用の原書は醫學に屬するもの多く物理書は Schoolbook 又は Volks Naturkunde など云ふ彼の國の小學中學等に用ふる讀本にてもあらんか塾中唯その原書一本あるものを學生は順番に之を寫取り對讀會讀して意義を研究したることとなり然るに今を去ること四十餘年安政三四年諭吉の年二十三四歳の頃と覺ゆ(千八百五十六七年)或る時筑前の黒田侯(長博)通阪の

折柄緒方先生は兼て侯の恩顧を得たる人にて其通阪を聞き大阪中之嶋の筑前邸へ伺候し侯の新に長崎にて購はれたる原書一本を暫時借用して宅に歸り急ぎ諭吉當時諭吉は塾長を召して云々の次第を告げたるにぞ之を見れば荷蘭最近の出版ワンドーベルツとなん題する究理書にて書中文字を讀むに違あらず唯その圖を一見しても驚くに堪へたり先生の言に黒田侯は金八十兩を投じて得たるものなりと云ふ八十兩と聞ては非常の大金なり假令ひ他に同本の賣物あるも學者書生の企て及ぶ可き所に非ず依て先生に乞ふて此書を黒田侯の兩三日滞阪中塾に留置くことに取成し乃ち塾中の同胞に談じ奇書奇なりと雖も空しく見ることも讀むことも許さず唯借用時間の許す限り之を寫取る可しとて甲乙丙丁の／＼筆墨紙を用意して即刻寫本に取掛り甲疲るれば乙これに代り乙の後には丙丁現はれ二晝三夜凡そ六十

時間一分時の休息なく文字も圖も見事に謄寫して校正を終りたるは書中エレキトルの部分なり黒田侯山發の期日來れば借用品は固より返さざるを得ず幾多の貧書生は恰も父母に離るゝ思ひを爲して原書に告別し後に寫本を熟讀すれば珍奇舉げて言ふ可らず從前の究理書を讀で吾々の知る處は硝子板の摩擦に由て起るものをエレキトルと稱す金屬と酸類とより生ずるものをガルハニと名づけて兩者相似たれども自から別あるが如し其ガルハニを起すの法は銀錢と銅錢とを重ねて其錢の間に羅紗の切れを挟み幾枚も積立てゝ圓筒形を成すと竹の灰吹の如くにして羅紗を浸すに漬物の酢か又は稀硫酸などを以てすれば忽ち一種のエレキトルを生じて積極消極の働を見る可し之をヴァルタセコロムと名づく云々等に過ぎざりしに今度の新奇書は英國電氣學の始祖とも稱す可きフハラデー氏の新説を譯述したる

ものにして吾々の從前奇として信じたるヴァルタセコロム杯は跡形もなくフハラデー發電器の式を圖に示して之を説明したる其新々奇々唯塾中の學生をして茫然心醉せしむるのみ六十餘原素を排列して積極消極の順を定めたるが如き想像外のとにして其時の奇談を語らんに勿々未だ説明の文を熟讀せざる中に原素排列の上位コイル(炭)とあるを見て一人云くコイルは炭なり炭とエレキトルと何縁あるガルハニは金屬より生ずるものなり是れは不審なり然らば先づ辭書を見よコイルに何か纏つた註はなきやとて辭書を調べても炭の外に別義なし夫れより次第に説明文を熟讀して發電器に用ふる亜鉛は云々炭は云々と解し得て最初の不審を一笑に附したることあり之を要するにフハラデーの電氣説は緒方の塾を震動せしめたるものにして以前は究理書を讀むにも専ら熱論を講究して餘念なかりしものが頓に

面目を改めて電氣の一方に心を寄すると爲り或は之を翻譯して里の友人に贈るもあり或は塾中にて有合の徳利并亞鉛木炭など集めて發電を試み道理は明白なれども實際に意の如くならずして空しく物の不足を歎息するもあり到底これを實地に試験することは叶はざりしかども電氣の理論丈けは寫本の教ふる通りに了解して遺す所なく當時の日本國中にて電氣の新説を知る者は唯大阪緒方洪庵先生の塾のみとて遙に江戸長崎等の同學生を眼下に見るの情なきに非ず亦是れ少年學生の血氣にはやる愉快なる可し

右は電氣學に關する昔の物語にして今日の實際に何も益する所なしと雖も當時の蘭學者なるものが如何に物理學に就て熱心なりしやの事實は想ひ見る可し迂老が恩師として仰ぎたる故緒方洪庵先生の學生が物理に重きを置きたるは云ふまでもなく其以前に溯り斯道の祖

師たる前野杉田の兩大家より以來百有餘年の間日本國中に物理の思想を養成して苟も學者をして眞理原則の外に逸することなからしめたるは之を先人の賜と云はざるを得ず然るに今や我日本は單に學問のみの日本に非ず政治法律あり商賣工業あり無限の人事錯雜して之に當る法も亦極めて錯雜なりと雖も暫く目を瞑して心を物外に解脱せしめ人間萬事經營の大本は何邊の邊に在るやと自問すれば天然の眞理原則に在りと自答せざるを得ず而して物理學は此眞理原則を教ふるものにして人間萬事を包羅する學問なれば後進の學生おの志す所あるべし或は政法に或は商工に海に山に川に森に其志す所の専門を攻むることならんと雖も其専門業の大本たる物理學の講究は決して忘る可らず吳々も勸告する所のものなり

貧富苦樂の巡環 (十八)

人智發達の完全を求めれば貧富苦樂を嘗め盡すより好きはなし生れて僅に飢寒を免かれ僅に教育の資を得て學問修業し長じて出身して財産を作り老して第二世の子を養育修業せしむると共に自から老餘を養ひ、扱安樂に死したる其跡に大なる遺産もなしと斯く順よく參れば其身は一代に貧富苦樂の境界を経て浮世の辛甘を嘗め盡し所謂海に千年河に千年にして下情に通ずるのみならず上情にも通達して人間萬事聞て驚かず見て怪まず居家處世の變通自在にして生涯の行路に拘泥する所なく第一世逝けば第二世これを相續し三世四世同様にして何れも當世の其身一代の中に自ら財産を作り出して隨て又自から使用し終ることなれば貧富苦樂は恰も人の年齢と共に變化して本人

一個の愉快安心のみならず之を大にしては天下公共の無事快活にして亦是れ一種の黄金世界とも名づく可き有様なれども不幸なるは開闢以來社會の組織は我輩の想像畫に反對して世の中に貧者もあり富者もありて其苦樂の區別は明白なれども貧苦と富樂と各別に獨立して一人の身を以て親しく之を開するを得ず貧者は貧家に生れて貧に死し富者は富家に生れて富に死する其趣は寒中に生れて寒中に死し春暖に生れて春暖に死するが如くにして一身能く四時の寒温冷熱を知る者少なきこそ遺憾なれ其の智徳の發生不完全なるも亦怪しむに足らざるなり例へば彼の徳川時代の封建諸侯の如き關原大阪陣の戰爭以來二百七十年の春暖中に死生して飽食姪逸曾て世に風雪の苦あるを知らざりし者なれば其愚鈍も亦慨して彼の如くなりしと同時に貧小の百姓等は祖先以來幾代を経て相替らず元の百姓にして智慧

も分別もなく粗衣粗食空しく農業の疾苦中に死生するみ富者貧者共に人生の本分を知らざる者なり然るに封建制度の破滅以來世態一新して貧富の變化も次第に劇しく成行き大名その他世襲の素封家にし
て容易に倒るゝ者あれば寒貧の小民一躍忽ち巨萬の富を致す者あり
舊富貴の滅亡は姑く擱き恰も之に交代したる新出來の暴富者こそ其
身一代に苦界より樂境に達して備に辛甘を嘗めたるものなれば甚だ
妙なりと雖も此新富貴の死後第二世第三世は如何ならんと云ふに其
境遇全く第一世に反して同日の談に非ず舊家にてても新家にてても富貴
の子は生れながらの富貴にして貧苦の眞面目を味ふに由なし貧苦の
下情に通ぜざる者は精神の不具にして隨て其身體も亦完全なるを得
ず假令ひ僥倖にして生得の健康體あるも之を維持する法を知らざれ
ば遂に全きを得ずして詰る所は心身暗弱の新主人たる可きのみ或は

二世三世は初世の餘德に浴して自から守成の望ありとするも之を四
世五世に傳へんとするは望外の非望にして假令ひ幸にして初世の家
名を存することあるも血統より云へば早く既に斷絶するか又は零落
して行く所を知らざる可し左れば世間に數多き新舊の富豪紳士貴族
の輩には子孫永續の法を講ずる者もある由なれども今日の富貴を以
て家に居り其富貴の家を其のまゝに子孫に傳へて永久ならしめんと
するは之を喻へば家の内に傳染病の細菌を培養して消毒の法を知ら
ず此家に住居を命じて病を避けよと遺言するに異ならず一切無益の
沙汰と云ふ可きのみ世間の事實斯の如くなれば我輩の想像に貧富苦
樂を人の一生涯に嘗め盡し無より出でゝ無に歸るの所望は一人の一
生涯に見えずして其期限を延ばし三四代に亘りて實行せらるゝが如
し第一世が無より出發し大に家を興して辛苦中に苦死すれば第二世

は無爲安樂にして大に財を散ずること恰も第一世が老餘に行ふ可き所を第二世の生涯に行ひ第三世第四世に至りてますく散財しますく失望して遂に心身の所在を失ふは即ち第一世の臨終に異らず斯くて一新富貴の終を告げんとする其間に更らに有爲の素寒貧を出し辛苦經營首尾能く名を成し家を興して子孫に傳ふること例の如くすれば其子孫が之を亡ぼすことも亦例の如くにして新陳代謝限りなきこそ文明世界の奇觀なれ左れば此貧富苦樂の新陳代謝は今の文明の程度に於て殆んど一定の約束にして免かる可らざるに似たれども其成行の順序を想像すれば誠に分明にして之を掌に指すが如し然らば即ち彼の子孫永續の法を講ずる人々に於ても假令ひ其家名家産の滅亡を永遠に防ぎ止むること能はざるも其滅亡期を延ばすの工風はあるべし千思萬慮す可き所のものなり

大節に臨んでは親子夫婦も會釋に

及ばず (十九)

我心に思ふ所を實行して苟も節を屈することなし之を獨立と云ふ獨立果して大切なりとすれば此一義の爲めには都て他を顧ることなく天地間に尊き者は自分一人なりと覺悟して平生は人に交るに寛仁大度を旨とし人言聞去つて皆善と稱する程に身構へしながら扱大節に臨んでは親子夫婦の間と雖も相互に會釋は無用なり例へば貧窮の娘が父母の難澁を救はんとて身を賣淫の醜境に沈めて自から愧ることを知らざれば世間にて之を怪しまずして却て之を孝子など稱す大間違ひの沙汰なり親が難澁ならば娘相應に働く可き仕事あり女の身に叶ふ丈けの苦勞して家の爲めにす可きは當然なれども淫を賣るは

女子の藝に非ず其辨別もなくして錢の爲に尊き身を穢すは是れ所
謂人非人にして斯る人非人の業を自身にて發意す可らざるは勿論假
令ひ父母の命令にても斷然これを拒む可し會釋に及ばざることなり
事柄は全く異なれども余が一身上にも似寄りの事あり明治の初年或
る富豪の人が私立の學校を作りたるに付き前後夫れ是れと相談に預
り教師の周旋などする中に自から其主人と懇意の間柄と爲り主人の
意は余をして直に其學校を管理せしめんと企望するものゝ如し當時
余が家には二男二女ありて男子は八歳と六歳ばかりにて尙ほ未だ教
育の年齢にもあらずれども余が心算の第一は此子供の成長を待て外
國に遊學せしめん夫れには大金を要することなれども家には財産な
し左ればとて政府の手筋を求めて所謂官費生にするなどは鄙劣にし
て最も面白からず何とかして子供の成長までに出来る丈けの財産を

作らんと思ひ妻と申し合せて家政を整へ勤儉を主とし物數寄もせず
花見遊山もせず唯一筋に子供の洋行費とのみ心掛け居たる時なれば
或は之を口外して他人に話したることある可し然るに或日のこと
なり彼の學校の主人なる富豪が來訪して語るやう兼て申す通り學校
の監督は何分にも引請を頼む之が爲めに報酬の月給も面白からずと
思へば爰に一案あり唯今一萬圓とか一萬五千圓とか云ふ金を進上し
て令息二名の洋行費に備へ置き愛子の年の長ずると共に其資金も亦
利倍増長す可ければ外國遊學の目的は今日より慥なり此御相談は如
何と云ふを聞き余が心中多少動く所なきを得ず一萬圓など云ふ大金
は生來目に觸れたることなき數なり今日より之を私有すれば子供
兩人の遊學費も苦勞に及ばず誠に好都合なりとは思へども待てしは
し彼の學校の監督は最初より自分の好まざる所にして其好まざる理

女子の處て非ず其母則ち又これ等の爲に事なきを嘆く一ともし

九十六

由は曾て變はることなきに今珍らしき大金の聲を聞て不本意ながらも先方の相談に應ずるは子供の爲めに自から志を屈するとなり子を愛するの情は切なりと雖も親たる者が心に思はぬ事を行ふて子供に奉公するの道理はある可らず家の貧富は運不運に在り數年の後に至りて遊學の事意の如くならざるも父母の罪に非ず不幸にして子供が洋行遊學せざるが爲めに無學の名を成すことあるも親の志は屈す可らず此一段に至りては親子の間も他人に等し會釋するに及ばずと獨り心に決斷し厚く先方の好意を謝して體よく其相談を斷りたることあり其後歲月の間に余が運命甚だ拙なからずして著書翻譯の筆を以て家を成し一切他人を煩はさずして子供の洋行に差支もなかりしは幸なれども或は之に反して家道次第に貧乏なるか又は余が短命にして爲めに子供の教育に不如意のことあるも余が本心に於ては曩に學

資金進上の相談に應ぜざりしを後悔せざるものなり如何となれば子供の教育は家の貧富に由る可し父母たる者が衣食住の費用を節して教育に厚うするは當然なれども尙ほ一步を進め鄙劣を犯しても子の爲めにするに云ふが如きは事物の輕重を誤るものなればなり左れば女子が親に孝行する爲め身を穢すも男子が子供を愛する爲めに節を屈するも共に人情の事にして随分心得違ひの起る可き場合なり幸にして余は此危き場合を遁れ今に至るまで心の底に曇を留めずして寢醒よく覺ゆることなれども人事繁多情實錯雜の世の中には余が前年の有様に彷彿たる場合も多くして其局に當りて進退に迷ふ人もある可し其決斷は固より他人に相談す可き事柄に非ず唯一身の獨立と深く自から信む自分の一身外には尊ぶ可き者もなし愛す可き者もなし佛語に云ふ天上天下唯我獨尊と覺悟して思ふ所を斷行す可き

ものなり

福翁百餘話終

明治三十四年四月二十二日印刷
同年四月二十五日發行

正價金拾五錢



發行者 時事新報社

東京京橋區南鍋町二丁目十三番地

右代表者 吉田東洋

東京芝區三田四國町二番地十七號

印刷者 中野鏌太郎

東京京橋區木挽町九丁目卅二番地

發行所 時事新報社

東京京橋區南鍋町二丁目十二番地

印刷所 帝國印刷株式會社

東京京橋區築地三丁目十五番地

福澤先生著書目次

て
332
/

福澤全集

先生四十年來の著書收めて此中に在り之を讀まざる者は未だ新日本の文明を語る可らず
（逓送料は別に申受く）
原本五拾部、百五冊
合本全五冊
正價拾貳圓

福翁自傳

先生自叙の詳傳にて併せて時勢の變遷を知るべく又立志處世の模範として裨益少なからず
（郵稅拾貳錢）
正價
上製壹圓
並製四拾錢
（郵稅八錢）

福翁百話

先生入念の著述宇宙の妙理及び居家處世の心得を諄々費きて何人も座右の規箴と爲すべし
（郵稅拾錢）
正價
上製壹圓
並製拾五錢
（郵稅六錢）

福翁百餘話

人生の獨立其他に付て懇切せられたるもの百話を讀みたる者は亦此書を讀まざるべからず
（郵稅貳錢）
正價
全一冊
拾五錢
貳錢

發行所 電話（編輯用）特新橋二二五（事務用）特新橋三二七
東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地
時事新報社

女大學評論

新日本文明社會の女子は如何に世に處し身に行ふべきか先生學拔の高論載せて此書に在り
（郵稅四錢）
正價
十四版合本全一冊
貳拾錢

修業立志篇

先生の演説及び論文慶應義塾の教科書にして懇切に後進子弟修學立身の心得を説示したり
（郵稅四錢）
正價
十二版全一冊
貳拾六錢

福澤先生浮世談

浮世の男女交際法を痛論せられたるもの一家の和氣春の如きを望むものには必らず一讀すべし
（郵稅貳錢）
正價
八版全一冊
貳拾五錢

癢我慢の論

明治十年
前者は西郷翁舉兵の心事を詳論し後者は士人處世の要を論じたる者共に一世の大議論大文章也
（郵稅貳錢）
正價
合本全一冊
拾八錢

出張所 電話（特東四九二）同 出張所
大阪市堂島濱通一丁目四十番屋敷

1102816523

慶應義塾図書館

